

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

トルコ語の数量詞遊離について

Floating Quantifiers in Turkish

栗林裕

KURIBAYASHI, Yuu

トルコ語の数量詞遊離について¹

栗林 裕

kuri@okayama-u.ac.jp

keywords: トルコ語, ウイグル語, 数量詞, 遊離, 部分格

1. はじめに

統語的文法現象の一つとして、数量詞の遊離という現象が日本語をはじめとするさまざまな言語で議論されている。「遊離」とは基本形から派生形への道筋があることが前提となる現象であり、生成文法的な研究で使用されるようになった用語であるが、今日では特定の枠組みにとどまらず広く認知されている。一般的には次のような現象のことを指す場合が多い。

主語からの遊離

- | | | | |
|-----|----|--------------------------|------------|
| (1) | a. | <u>3 人ノ 学生ガ</u> 走ッタ | (Q ノ NC 型) |
| | b. | 希望シタ <u>学生ノ 3 人ガ</u> 走ッタ | (N ノ QC 型) |
| | c. | <u>学生ガ 3 人</u> 走ッタ | (NCQ 型) |
| | d. | <u>学生 3 人ガ</u> 走ッタ | (NQC 型) |
| | e. | <u>3 人学生ガ</u> 走ッタ | (QNC 型) |

¹本稿は京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センターで開催された2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」(平成29年3月30日)及び、大阪府立大学I-site なんばにおいて言語の類型的特点をとらえる対照研究会第4回公開発表会・兼「数詞句の構文的性格」を考える国際シンポジウム(平成29年4月16日)で口頭発表したものに改訂を加えたものである。会場でコメントをいただいた方々と査読者に感謝いたします。本研究は科学研究費補助金 基盤研究(C)「チュルク諸語の動詞複合体についての記述的・理論的研究」課題番号16K02676の支援を受けている。また、トルコ語の母語話者として岡山大学大学院生 Esra Kira 氏、Merve Dağ 氏、バムツカレ大学 Zeynep Gençer 氏、キルギス語の母語話者として大阪大学大学院生 Nazgul Shamshieva 氏、ウイグル語の母語話者として新疆大学 Nebijan Hebibulla 氏の協力を得た。

本稿は、筆者を今まで馴染みの少なかった研究分野に導いてくださり、時々励ましのお言葉をいただいたことが筆者にとって、さらなる研究へのエネルギーになった庄垣内正弘先生に捧げます。

数詞と数詞が関連する名詞（主要部）との関係において、(1a)が基本形で、そこからそれ以外の(1b-e)が派生する場合を数量詞遊離とする立場と、(1c)が基本形で、それ以外の(1a-b, d-e)が派生形とするものを数量詞遊離とする立場がある。また、それぞれの構造に関連はないとする立場では、数量詞遊離は認めないということになる。本稿ではトルコ語を中心に、いくつかのチュルク諸語において数量詞の遊離が認められるのかどうかを議論する。本稿の構成は本節を含めて全体で8節から構成され、順に以下のように考察を行う。次の第2節ではトルコ語の数量詞遊離の現状について考察する。第3節では数量詞に類似した現象である部分格の問題などを導入する。第4節では主語や目的語など文法関係に注目して、そこからの遊離が可能かどうかをみる。第5節では数量詞遊離が関わるようにみえる使役構文について検討する。第6節ではトルコ語以外のチュルク諸語の状況として主にウイグル語を中心に検討する。第7章は数量詞有利に関わる理論的な問題とトルコ語の数量詞の遊離の現象がどう関わるのかを論じる。第8節が以上の議論のまとめとなる。

2. トルコ語の数量詞遊離の状況

トルコ語では一般的に数量詞の遊離は認められない。以下の例は、(1)に対応させて想定される数量詞の遊離を検証したものであるが、(2e)の(Q NC 型)以外はいずれも適格な文とはならない。

- (2) a. *üç-ün öğrenci-leri koş-tu. (Q / NC 型)
 3-GEN student-POSS.3PL run-PST
 「3人の学生が走った」
- b. *iste-yen öğrenci-nin üç-ü koş-tu. (N / QC 型)²
 want-PRT student-GEN 3-POSS.3SG run-PST
 「希望した学生の3人が走った」
- c. *öğrenci-ler üç koş-tu. (NCQ 型) = (NQC 型)
 student-PL 3 run-PST
 「学生3人が走った」

² öğrenci-ler-in üç-ü (student-PL-GEN 3-POSS.3SG) 「学生達の内の3人」は適格な表現である。

- e. üç öğrenci koş-tu.
 3 student-PL run-PST (Q NC 型)
 「3人学生が走った」

以上からトルコ語は基本的には数量詞は遊離しないといえることができる。つまり、トルコ語では名詞句内の構成素の順番が厳密に決まっており、そこからの逸脱は許されないと考えられる。次にトルコ語の名詞句内の構成素の順番はどのようなになっているのかについて考察する。トルコ語の構成素の基本的な順序は「指示詞-数詞-形容詞-被修飾名詞（主要部）」である。

- (3) a. bir kırmızı çiçek 「一本の赤い花」
 one red flower
 cf. kırmızı bir çiçek 「赤い花」
 b. o, bir kırmızı çiçek 「あの、一本の赤い花」
 c. *o kırmızı çiçek bir 「あの赤い花一本」
 d. *kırmızı o bir çiçek 「赤いあの一本の花」

(3a)のように、bir が数詞として使われる場合は形容詞に先行し、数詞として使われない場合は、形容詞と名詞の間に bir が入り、数詞以外の機能的な役割を果たす。基本語順である「指示詞-数詞-形容詞-被修飾名詞」を逸脱した(3c-d)は不適格となる。

3. 数量詞遊離に類似した表現

3-1. 副詞としても、数量詞（連体詞）としても機能する語

一見、数量詞の遊離の一例のようにみることができいくつかの例について考えてみたい。(4a)は、数量詞が後置されている(4b)より派生されているように見える。しかしトルコ語では、目的語が動詞の直前以外の位置に来ると、意味的に限定的な読みになり、意味が変わってしまう。従って、(4a)は(4b)から派生されたと考えすることはできない。つまり(4a)と(4b)はそれぞれの文の意味は同じではないので派生関係にあるわけではなく、ある語(この場合は çok「たくさん」)が数量や程度を表す副詞的にも使えるか、数量を表す連体詞的にも使えるかの問題になる。

- (4) a. bu kitab-ı çok oku-du-m. 「私はこの本（限定的）をたくさん読んだ」
 this book-ACC many read-PST-1SG
 b. çok kitab oku-du-m. 「私はたくさんの本（不定）を読んだ」
 many book read-PST-1SG

また、数量詞が回数を表す場合も注意を要する。çok「沢山」は動詞を修飾する副詞にも、名詞を修飾する形容詞的な数量詞にもなるが、iki「2」などの数詞は裸のままでは副詞的機能がない。回数を表す場合には、(5c)のように助数詞 kez「回」を付加しなければならない。

- (5) a. iki kitab oku-du-m. 「私は二冊の本を読んだ」
 2 book read-PST-1SG
 b. *kitab-ı iki oku-du-m. 「私は本を二冊/二回読んだ」
 book-ACC 2 read-PST-1SG
 c. kitab-ı iki kez oku-du-m. 「私は本を二回読んだ」
 book-ACC 2 times read-PST-1SG

3-2. 部分格(partitive case)の場合

数量詞が名詞に後続する場合は例外的にみられる。例えば、(6b)は(6a)から派生しているように見えるが、(6a)と(6b)には認知的な意味の違いがあるので、派生関係を認めることはできない。(6b)は特定の水から二杯という意味で、(6a)にはそのような限定的な意味はない。このように限定的な意味が出ることから、部分格と呼ばれることがある(Göksel & Kerslake 2005: 185)。また、部分格は主要部がゼロ格の場合は修飾部が奪格あるいは属格であるのが原則で、修飾部が対格の場合は(6c)にみられるように適切な文脈が必要となる。しかし6節でみるように部分格の修飾部が奪格であるとする原則はウイグル語やキルギス語では緩和される(cf. 16)。またインターネット上から採取した口語表現には誤用により目的語から名詞の個数を表す数量詞が遊離した例もみられる(cf. 6)。

- (6) a. iki bardak su iç-ti-m.
 2 glass water drink-PST-1SG
 「私は二杯の水を飲んだ。」
 b. su-dan iki bardak iç-ti-m. 他動詞目的語からの遊離

water-ABL 2 glass drink-PST-1SG

「私は水から/水を二杯飲んだ。」

- c. su-yu iki bardak iç-ti-m. 他動詞目的語からの遊離
water-ACC 2 glass drink-PST-1SG (適切な文脈が必要)

「私は水から/水を二杯飲んだ。」

cf. lustral yanlışlıkla 2 tane iç-ti-m, bir şey ol-ur mu? ³

L. mistakenly 2 tablet drink-PST-1SG something happen-AOR Q

「ルストラル(薬品名)を間違って二錠飲みました、大丈夫でしょうか？」

[<https://tr.instela.com/duyurular/lustral-yanislikla-2-tane-ictim--bir-sey-olur-mu--301661>]

4. 使役, 他動詞, 自動詞における頻度数量詞の遊離 (主語や目的語からの遊離)

本節では名詞句が動詞に対してもつ文法関係を検討し、それに相関して数量詞の遊離があるのかどうかを検討する。(7)から(10)の例では(b)文が基本文で、(a)文が派生した文になる。(7)から(9)は使役文と他動詞文であり、使役接辞あるいは他動詞化接辞により名詞に直接的に対格を与えられることで、それぞれの文において目的語が対格表示されている。(7)は使役構文の目的語からの頻度数量詞の遊離と考えられる例である。頻度数量詞⁴は日本語文法では他の数量詞と区別して扱われることがある。つまり1節の(1)や(2)の例は、数量詞と名詞がお互いに参照しているが、頻度数量詞はこのような参照がない(岩田2013: 3)。トルコ語では頻度数量詞も遊離を示すことから日本語とは異なる振る舞いを見せる。

- (7) a. hoca (cemaat-e) namaz-ı iki-şer rekat kıl-dır-dı. 使役目的語からの遊離
teacher community-DAT pray-ACC 2-DIS rakat do-CAUS-PST

「導師は(信徒に)お祈りを2回ずつのラカート⁵でさせた。」

- b. hoca (cemaat-e) ikişer rekat namaz kıl-dır-dı.
teacher community-DAT 2-DIS rakat pray do-CAUS-PST

「導師は(信徒に)2回ずつのラカートでのお祈りをさせた。」

³ Esra Kıra 氏によると非文法的であるという。数量詞が遊離していない Yanlışlıkla iki tane lustral içtim. か、あるいは部分格の Lustral-den(-ABL) yanlışlıkla iki tane içtim が正しい(Zeynep Gençer 氏 p.c.)。

⁴ 岩田(2013: 3)では「今年は東京へ3回行った。」及び「彼には3度会ったことがある。」の例をあげ、基本的に NCQ 型しかないとする。

⁵ イスラム教での礼拝の動作の単位であるラクアの複数形で、定められた屈伸の所作と祈りの言葉を唱えることから成る。

(8)と(9)は、他動詞の目的語からの遊離で、中でも(9)は頻度数量詞の遊離と考えられる。

- (8) a. ders-i bir saat uza-t-ti-m. 他動詞目的語からの遊離
 class-ACC 1 hour extend-CAUS(Vt)-PST-1SG
 「私は授業を一時間延ばした。」
 b. bir saat ders-i uza-t-ti-m.
 1 hour class-ACC extend-CAUS(Vt)-PST-1SG
 「私は一時間の授業を延ばした。」
- (9) a. zil-i on kez çal-dır-dı-m. 他動詞目的語からの遊離
 bell-ACC 10 times ring-CAUS(Vt)-PST-1SG
 「私はベルを10回鳴らせた。」
 b. on kez zil-i çal-dır-dı-m.
 10 times bell-ACC ring-CAUS(Vt)-PST-1SG
 「私は10回、ベルを鳴らせた。」「私は10回のベルを鳴らせた。」

また(10)は自動詞の主語からの頻度数量詞の遊離と考えられる。

- (10) a. zil, on kez çal-dı. 自動詞主語からの遊離
 bell 10 times ring-PST
 「ベルが10回（一気に）鳴った。」
 b. on kez zil çal-dı.
 10 times bell ring-PST
 「（断続的に）10回のベルが鳴った。」
 「10回、ベルが（一気に）鳴った。」

(7)から(10)の例は一見すると数量詞の遊離のように見えるが、副詞と動詞との隣接性の問題であるともいえる。つまりトルコ語の副詞の性質として、動詞に隣接しなくても動詞を修飾できるとも考えることができる。日本語では、数量詞と主要部名詞を「の」で接続することで名詞句が形成されていることが明示され、それに基づいて名詞句の範囲を確定することができる。しかしトルコ語の名詞句にはそのような性質がないので、(7b-10b)で数量を表す部分が本当に名詞

句内の要素か否かは不明確である。そこで例文の(8)と(10)に基づきながら等位接続が可能かどうかをみることで数量詞が主要部と構成素を成しているかどうかを検証する。

- (8) b'. bir saat ders-i, on dakika çay molası-nı uza-t-tı-m.
 1 hour class-ACC 10 minutes tea break-ACC extend-CAUS-PST-1SG
 「私は一時間授業を、10分間休憩時間を延ばした。」

- (10) b'. iki kez zil, iki kez çan çal-dı.
 2 times bell 2 times gong ring-PST
 「2回のベルと2回の鐘が鳴った。」

(8b')では数量詞は変化の量をあらわし、(10b')では数量詞句は頻度をあらわしており、主要部名詞と構成素を形成しているようである。もしこの分析が正しいとすると、対応する(8a-b)と(10a-b)の間には派生関係を認めることができることになり、トルコ語では回数などの頻度を表す場合など一定の条件のもとで他動詞の目的語と自動詞の主語⁶からの遊離があるということになる。なお文法関係に基づく分析では他動詞主語からの遊離は排除されるので「統語的能格性」が数量詞遊離に認められるという結論につなげる余地もあるだろう。

5. 使役構文における数量詞遊離

ここで再び目的語に関わる数量詞遊離を検討する。(11a)と(11b)よりトルコ語では他動詞の目的語からの数量詞遊離が許される。

- (11) a. o **beş adet** davetiye bas-tı.
 s/he 5 piece invitation print-PST
 「彼(女)は5枚招待状を印刷した。」
- b. o davetiye-yi **beş adet** bas-tı. 他動詞目的語からの遊離
 s/he invitation 5 piece print-PST
 「彼(女)は招待状を5枚印刷した。」

⁶ (10b')が自動詞主語の編入であるとする、数量詞の遊離ではなく、副詞的修飾構文であるとも考えられる。

また、さらに(12)にみられるように、使役形による対格付与でも数量詞は遊離が可能になる。

- (12)a. Ben on-a davetiye-yi **beş adet** bas-tır-dı-m. 使役目的語からの遊離
 I s/he-DAT invitation-ACC 5 piece print-CAUS-PST-1SG
 「私は彼(女)に招待状を5枚印刷させた。」
- b. Ben on-a **beş adet** davetiye bas-tır-dı-m. 使役目的語(対格なし)
 I s/he-DAT 5 piece invitation print-CAUS-PST-1SG
 「私は彼(女)に5枚の招待状を印刷させた。」
- c. Ben on-a **beş adet** davetiye-yi bas-tır-dı-m. 使役目的語(対格あり)
 I s/he-DAT 5 piece invitation-ACC print-CAUS-PST-1SG
 「私は彼(女)に5枚の招待状を印刷させた。」

上記の事実より、使役化の全体の派生関係として基底の文は(11a)のような他動詞文であり、そこから使役化により(12b)が派生され、次に目的語の前置がなされて、最終的な表層形である(12a)になると考えられる。以上の派生関係を図式化すると以下のようなになる。

図1 使役文にみられる目的語の数量詞遊離の派生
 (11a) → 使役化 → (12b) → 目的語前置 → (12a)

6. 現代ウイグル語及び現代キルギス語の状況

次にチュルク諸語の中から、中央アジアのウイグル語やキルギス語についての例を検討する。以下の例はウイグル語からのものであるが、(13a)から(13b)への派生が考えられるとすると、トルコ語同様に他動詞の目的語からの数量詞遊離が許されるということになる。

- (13) a. Äli **bäş danä** täklipnamä bas-ti. ウイグル語
 A. five piece invitation print-PST
 「アリは5枚の招待状を印刷した。」
- b. Äli täklipnami-ni **bäş danä** bas-ti. 他動詞目的語からの遊離
 A. invitation-ACC five piece print-PST

「アリは招待状を5枚、印刷した。」

さらに(14a)から(14b)への派生が考えられるとすると、使役形による対格付与でも数量詞は遊離が可能になる。

- (14) a. Män un-iŋ-ğa **bäſ danä täklipnami-ni** / **täklipnamä** bas-tur-du-m.
 I s/he-GEN-DAT 5 piece invitation-ACC / invitation print-CAUS-PST-1SG
 「私は彼(女)に5枚、招待状を印刷させた。」
- b. Män un-iŋ-ğa **täklipnami-ni** **bäſ danä** bas-tur-du-m. 使役目的語からの遊離
 I s/he-GEN-DAT invitation-ACC 5 piece print-CAUS-PST-1SG
 「私は彼(女)に招待状を5枚、印刷させた。」

さらに(15a)と(15b)では「リットル」などの分量を表す数量詞の遊離も許される。

- (15) a. **bir litir zäytun yeğ-i** al-di-m. ウイグル語
 one litre olive oil-POSS.3SG buy-PST-1SG
 「1リットルのオリーブオイルを買った。」
- b. **zäytun yeğ-in-i bir litir** al-di-m. 他動詞目的語からの遊離(単位名詞⁷)
 olive oil-POSS.3SG-ACC one litre buy-PST-1SG
 「オリーブオイルを1リットル買った。」
- cf. **zeytin yağ-in-i bir litre** al-dı-m. トルコ語
 olive oil-POSS.3SG-ACC one litre buy-PST-1SG
 「オリーブオイルを1リットル買った。」

また(16a-b)にみられるように他動詞の目的語が奪格である場合もトルコ語と同様に許される。この場合、部分格のほかに対格名詞からの遊離も可能であることに注意したい。しかし、いずれの場合も意味が異なるので派生関係が成立しているとは言えない。ウイグル語と同様にキルギス語でも同じ振る舞いを見せる。

⁷ cf. 江畑(2017)

- (16) a. ikki istakan su iç-ti-m. ウイグル語
 2 glass water drink-PST-1SG
 「私は二杯の水を飲んだ。」
- b. su-din / su-ni ikki istakan iç-ti-m. 他動詞目的語からの遊離
 water-ABL / water-ACC 2 glass drink-PST-1SG
 「私は水から/水を二杯飲んだ。」
- cf. Suu-dan / suu-nu èki stakan iç-ti-m. 他動詞目的語からの遊離
 water-ABL / water-ACC 2 glass drink-PST-1SG
 「私は水から/水を二杯飲んだ。」 キルギス語

さらに、トルコ語では変則的とされた他動詞目的語からの個数を表す数量詞の遊離は大きな問題なく受け入れられ、キルギス語も同様である。

- (17) Aspirin-ni xatalışip ikki danä iç-ti-m / ye-di-m. ウイグル語
 A.-ACC mistakenly 2 tablet drink-PST-1SG / eat-PST-1SG
 「私はアスピリンを間違って二錠飲みました。」他動詞目的語からの遊離
- cf. Aspirin-ni adaş-ıp/jañil-ıp èki tabletka iç-ip al-dī-m. キルギス語
 A.-ACC mistake-CV 2 tablet drink-CV take-PST-1SG
 「私はアスピリンを間違って二錠飲んでしまった。」他動詞目的語からの遊離

以上をまとめると、ウイグル語やキルギス語では数量詞が比較的自由に遊離ができると言える。また(16b)ではトルコ語と異なり、部分格は必ずしも必要ではなく、対格のまま遊離をすることができることを示している。

7. 理論的な研究との関わり

本稿ではトルコ語を中心に、いくつかの中央アジアのチュルク諸語と対照させながら数量詞の統語的位置について考察してきた。トルコ語の数量詞の遊離現象が示すところは、一定の条件のもとでの例外があるものの、基本的には派生関係が成立しているというよりも、ある語が副詞的にも連体詞的にも使用できるかどうかの問題である。ただし、(8)から(10)で見たように若干ではあるが、派生関係が成立しているように見受けられるものもある。理論的な観点からの数量遊離の分析の代表例として、Miyagawa (2014: Ch1)の分析に基づきながらト

トルコ語の現象を考えることにする。トルコ語では(15a-c)の対比からわかるように基本語順から逸脱する主要部名詞に後続させて数量詞を置くことができない、つまり日本語と同じ位置に数量詞を生起させることはできない。もし「相互 c 統御条件」を維持するなら、トルコ語には日本語とは異なる非対称的な名詞句の階層的構造を仮定しなければならない。さらに「相互 c 統御条件」のもとでは非能格述語からの数量詞の遊離は文法的にならない。トルコ語では基本的に遊離が認められないので、非対格の仮説（目的語から主語への移動を想定）により動詞に隣接する数量詞と主語名詞を関係付ける数量詞の分析(Miyagawa 2014: Ch1)は適用されないことを予測し、事実言語データは(19a-b)の対比にみられるようにトルコ語では数量詞遊離に基づいた非対格の仮説による分析を適用することができない。

- (18) a. **üç çocuk** kahkahalarla gül-dü. 非能格述語
 3 child raucously laugh-PST
 「3人の子供がゲラゲラと⁸笑った。」
- b. ***çocuk üç kişi** kahkahalarla gül-dü. 非能格述語（遊離あり）
 child 3 person raucously laugh-PST
 「子供が3人ゲラゲラと笑った。」
- c. ***çocuk kahkahalarla üç kişi** gül-dü. 非能格述語（遊離あり）
 child raucously 3 person laugh-PST
 「子供がゲラゲラと3人笑った。」
- cf. ?**bala qaqaqlap üç kişi** küldi. 非能格述語（遊離あり）
 child raucously 3 person laugh-PST
 「子供がゲラゲラと3人笑った。」 ウイグル語
- (19) a. **üç çocuk** ofis-e gir-di/ gel-di. 非対格述語（遊離なし）
 3 child office-DAT enter-PST/ come-PST
 「3人の子供がオフィスに入った/来た。」
- b. ***çocuk ofis üç kişi** gir-di/ gel-di. 非対格述語（遊離あり）
 child office-DAT 3 person enter-PST/ come-PST
 「子供がオフィスに3人入った/来た。」

⁸ 「ゲラゲラと」は動詞句副詞で右側の要素は動詞句内に存在することになる。

8. まとめ

本稿で考察してきたことから、次のようにまとめることができる。

1. トルコ語では基本的には数量詞は遊離せず、名詞句の中での語順が厳密に決まっている。一方、ウイグル語やキルギス語ではトルコ語に関わるこの条件は若干、緩和されている。
2. トルコ語では、自動詞主語と他動詞目的語からの頻度数量詞の遊離は可能になる場合もあるが、他動詞⁹主語からの遊離はみられない。これは、数量詞の遊離に関する統語的能格性の現れと見做すことができるかもしれない。あるいは、別の見方をすれば文中に二つ以上の名詞の焦点をとることができないという機能的な理由で文法性が落ちる原因となっている可能性もある。
3. 使役態にみられる文法関係の変更による対格の付与や語順の変更による対格表示された名詞が数量詞に前置されることにより、名詞と数量詞が比較的自由に結びつくことはありえる。つまり、主要部名詞が限定的である場合に数量詞遊離が生じるといえる¹⁰。この分析により、なぜトルコ語の分格でも数量詞が後置されて限定的な解釈になるかも説明できる。これらの事実は名詞句内での語順は厳しく制限されているというトルコ語の一般的な性質からは矛盾しているように考えられるかもしれない。しかし対格名詞が数量詞に対して前置されると分析するよりも、むしろ焦点になる数詞を動詞の直前である焦点の定位置に置くとする分析の方がトルコ語の統語法の焦点位置の原則と合致しており、説明として一般性が高い。
4. ウイグル語はトルコ語よりも数量詞が副詞的に自由に使える。従って、数量詞遊離の派生を仮定できる余地はあるかもしれない。チュルク諸語間にみられるこのような異なりが何に起因しているかは今後の課題であるが、一つの可能性として、文中の名詞句の取り出し（関係節化）がトルコ語では厳しく制限されているのに対して、ウイグル語やキルギス語等では緩和されていることなどの類型論的特徴との連動性を追求できるだろう。

⁹トルコ語で無制限に遊離が許されないことは、(15)を参照。

¹⁰角道正佳氏(p.c.)

略記号

ABL: ablative, ACC: accusative, AOR: aorist, CAUS: causative, CV: converb, DAT: dative, DIS: distributive, GEN: genitive, LOC: locative, PASS: passive, PL: plural, PST: past, POSS: possessive, PRT: participle, Q: question, SG: singular, 1: first person, 3: third person

参考文献

- 岩田一成 (2006) 『日本語数量詞の諸相：数量詞の位置と意味の関係を中心に』
博士論文. Osaka University Knowledge Archive.
[<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/1839>]
- 岩田一成 (2013) 『日本語数量詞の諸相：数量詞は数を表すコトバか』 くろしお出版.
- 江畑冬生 (2017) 「サハ語の数量詞句」 ms. 新潟大学.
- Göksel, Asli and Celia, Kerslake. (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Miyagawa, Shigeru. (2014) *Case, argument structure, and word order*. Routledge.
- 高見健一・久野暲 (2014) 「第3章 数量詞遊離 再考」『日本語構文の意味と機能を探る』 89-120. くろしお出版.

Floating Quantifiers in Turkish

Yuu KURIBAYASHI

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

In this paper, I examined whether floating quantifiers can be found in Turkish or not. This research question has not been discussed at length in previous literature because the constituent order of Turkish noun phrase structures is rather restricted. However, close examination of Turkish floating quantifier constructions reveal that quantifiers representing frequency can be postposed regarding accusative marked head nouns. Furthermore, I demonstrated that the restrictions on floating quantifiers are relaxed in central Asian Turkic such as New Uyghur or Kirghiz.